

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	紫星傳 : 雜録
Author(s)	自適
Citation	龍南會雜誌, 79 : 14 - 21
Issue date	1900-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5560">http://hdl.handle.net/2298/5560</a>
Right	

絶ばなり。其法は縝密に之て而も簡捷、警拔にして而も順當なるを原則とす。故に縦ひ烟波洋々裡に歸結することあるも、決まて散慢と纖弱との謂にあらす。余は韓非の文に於て、歸結は其尤も獨擅の長技なるを認めまればあらす。見よ說難亡徵五蠹の諸篇を。恰も百萬の奔馬を一號令の下に控制するか如く、警拔極りて、眞に千古の奇觀にあらすや。蓋し文の奔放壯快彼の如き、結法此の如くなるにあらすんば、文勢裁斷を欠ぎ、關鎖を失ひ、散慢婉々として、人の耳目を提ぐるに足らざる也。若し彼をして此長技ながらめんか。彼の文章は此に其光彩の半を失はん、危哉。然れども是れ長篇に於て然るのみ。短篇に於ては、彼亦た好んで首尾呼應格を用ゆる者の如き。是法や、擅り論語等に既に多く見る所に之て、先秦に在て既に希有の結法にあらすと雖、之を巧に使用するべきは、亦能く文に饒致を生ぜしむるに足る。説林の諸篇を見るべし。

雜 錄

紫 星 傳

自 適

慕はまじかな我尊き友。自然の美は世路の崢嶸に躓きま輩を容るゝに足れども、悲める彼の眼はうるはしき花に涙あるを見るにあらすや。されば悲む者には悲を與へ喜ぶ者には喜を映らしむる此れ自然の景象なり『己の命の如く愛せよ』ヨナタンとダビデとの温き懷に接せしめてこそ、我に盡きざる慰藉の感せらるべけれ。然れども眞の友道や誠に稀也。紛々たる塵俗裡に陷没して更に神靈の光に浴せざる者の、此間の消息を解せんは抑も難き。名利の奴となれる彼等には、これやがて已れ

の慾を充て樂に淫する一の器具とや見えん。顧みて自ら思ふ、賦性、薄みして修得も又妙し。仰て日月の照覧に耻ぢ俯して山河の長へなるに愧づ。只聊か恃む所は我不肖を憐むの友あり、數に於て五指を屈するに足らざれども、自ら期す我は天の恩寵を畏みて此の爲めに盡すべき道を盡さむことを。一日二三子と船を清流に泛ぶ。逝く春の名残を落花一片の影にとゞめ、流れてやまぬ水の上を青葉の風にさわく。と。ゆらく、處はこゝ、人はこの人。敢て舷を叩きて空明を撃ちし古人を傲ふにあらす。斯遊を追懷えて終世の慰藉となることあらば我は談する所の二三を録えて自ら供せん。談者は異れども心の奥に互に通ずる光は限なく闇を照して一元に歸せしむ。

一

諸子の知遇を昊天に謝する毎に、我は死して尙生ける尊き一友を追想せざるを得ず。其輝きし眼は消え其紅の唇は亡せられども彼か温き愛は今尙我胸にあり。常にも彼が墓畔を音なふが中に、光も麗かに明けわたる新歳の其日の夜は墓前に佇みて終宵彼の冥福を祈るを定めとする也。老も若きも笑み戯れて初春を祝ふものを、涙に生ひ涙に潤む苔の下に無言の寂えさを守る墓石幾何。花咲ふ春の面影はいづくに認めん。身をさく風に凜然とえて闇の奥を眺むれば、星斗きら／＼と輝きて幽玄のさいやさわり。思へば三歳の前の秋の暮、彼の最後の呼吸をひきとりしときの夜は萬里を亘る天風に燦爛とえてきらめく星の數のみ多き、さながら其宵の様なりき。音容尙耳目にありて、彼や已に無し。來り弔ふ毎に、墳塋自ら動くが如く、闇の中にも白衣の姿朦朧と顯はるゝを見ては、神威の嚴かにも慕はしきを感じて幽寂のうち秀靈の念に充されざることもなかりき。我は彼れ及彼が死によりて聊か朋友とゆふものゝ義を髣髴し得たるを覺ゆ。我素より人を愛せざるにあらす、否我は

誠に総ての人類を愛せむと欲する也。されど我に圓滿の靈光あるにあらず、具足の教化あるにあらず。微小、弱なる我の如何でか愛を彼等総てに及ばし得べき。況んや人多く詐偽巧佞に走りて誠實の影だに見るべからざるに於てをや。義と愛とに據りて動かざれど教ふる神命の意味深きに感ぜ、其の住家の狭小なるを笑ふ者ありしに答へて、我若し此小屋に充つる友あるを得ば已に足れりといひし古希臘の哲士の言を味ひて、我は寧ろ滔々たる才人の交情を羨まず、我に只會心の一人あるを喜ぶ也。只此の一人と雖、死きて尙生ける訓と喜とを與ふ。憾むらくは蕙蘭早く碎けて之を諸子に介し得ざることを。と。

二

聖く哀しきことを承るものかな。君が亡友の物語を悲む我が眼の露には我が亡き友に關連せる更に慘なるさまの映えたり。目を擧ぐれば此の江山と若葉と希望に滿ちて生き／＼たるを見るものを、獨り秋風落寞の物語してこの生氣を破るに忍びされども、人心の傾倒を見、社會の潮流を察しては言はざるを得ぬ切々の情あり。親を慕ふ子の心にもまゝて親は子を思ふなるに、哀れなる子あり。其父母共に心正しからず、世に恐ろしき罪業重りて後に圜圉の露と去せたりしが、我か知れる家に助けられし其男子は此に我等と共に學ぶ幸福に遇ひたり。齡の我等に數多く超えたりし故にはあらで生得より已に俊秀なりと彼は爾來長友として同窓に頼まれ間もなく、妖星一夜紫の光をなまて西の方へ落ちて又見ぬ人の數に入りぬ。彼に一人の妹ありき。運命の人間を弄ぶこと甚き哉、彼女は父母の肉慾の犠牲となり、幼より歌妓たるべき域に埋りしなり。今は只一人を庇とも頼みし其兄のはかなくも亡せたるを奈何せむ、系統と境遇とあくまでも濁れる水に少々も染まぬ彼女の良姓

の常に襲ひ来る風雨の嵐に碎けむする苦まさを唯このためと忍びしその兄は遂に紫の星と化えて消えたる也。我は最も彼を知れるものなれば、屢其墓を弔ひけるが、これは彼の死後二十日ばかりまでの夜のことなり。墓の前に人影あり、近きて其妹なるを知りまが、怪しさは顔に手に血痕のにじめるを覺えぬ。

かの憂この憤、忍び難きに忍びて此處に到りしが、今は頼るべき糸と共に斷れ、柳眉おのづから昂りて物語りま血痕の由來は誠に慘憺なり。滔々たる男子多くは俗慾の奴隸となり、世に時めきて道念あり品位あり且敏腕ありと、もてはやさるゝ所謂豪傑所謂紳縉も彼等の前には、骨なく手足なき一種の動物と化せざるは少く、賤女は多く是れ蝮蛇に似たるもの、天日闇く腥風慘たり。此裡にありては禍は常に善良を捕ふ。彼に巧の藝と美き貌とあり。彼は雇主唯一の寶玉なり。然其藝を以てのみ立つ決心愈々堅くまて些も婦女の純潔を汚さしめざる美質は、常に鞭撻の苦を招く基となり。彼が心身に暫しの靜安なかりしが、此頃に到て一大富豪の利に陷はされま主人は益々苛責して人格の聖淨を毀損せんとす。此夜見る處の血痕は則ち彼が守操の堅固と主人の忿怒と衝突またる結果にまて、其苦痛の甚さ、彼をして生存の價值を疑はしめ思はず亡き兄の前に咽はしむるに至りまなり。彼は語りて此に至り眼を閉ちて此激情を鎮めんとまたる如くなりしが、暫焉更に切々の悲調を以て自らいふ。さはいへども苦痛を受くる毎に是れ神が父母の罪を償はしむるに非るかと思へば苦しき中にも自ら慰む心地す、世を亂ま人を傷けま恐るまき父母の所業は死またりとて赦されず必ず彼世にありて苛責に遇ひ給ふらむ、妾が受る苦痛は其罪を消し其苦を減せまひる爲めの神のまわざなるべま……………。

憤怒の裡にかすかなる微笑を含みて、かなたの空を仰ぎまが、時、雲間洩る月の光を、其半顔に浴びて立ちま、彼女の姿、崇高なる氣品のいづれ、ともなく浮動するありき。

今にまで之を思ふ。我は「父母の犯せる罪を躬らに負うて其苦を樂み」ま彼女の語に無限の感慨を惹き起す也。一賤妓の片語のみといふ勿れ、素より曾て温きホームにも浴せず一日の教育だに受けざる者なり。されども生得の人格は溪間の蔭にひそめる清澄の水に似たり。露となりておち、泉となりて湧く折の水は塵の影だにあらぬよき姿なり。耳を聳て、總ての人間の深奥にひそめる微かなる聲を聞け、毒婦惡漢も死の如き終局問題に遇ひま刹那の叫は往々美妙の響を傳るに非ずや。況んや石にせかれ岩に激まても、尙其の清純を失はざる碧潭の潔きを得るをや。

他の犯せる罪を躬ら負ひて其苦に安ず。思ひ回らせば古今の仁人義士の、義に倒れ仁に殉またる美はまき蹟よ、これらの多くは斯思想を經緯とまたる結果にあらざるか。朝夕をはからざる人心の迷夢を醒して眞如の靈光に浴せまめん爲に釋迦は深山の苦業に我身を痛め、正成の忠魂永く湊川畔に彷徨ひてこそ我芙蓉峰は少とも汚さるゝことなくまて千古の秀麗を保つなれ。信仰ある神學者は、神が十字架上に基督の生血を求め給ひし事實を解して、人類を子の如く愛し給ふ神が其墮落を見給ひし御憐みの表顯にまて之によりて其罪赦され再び高尚の生命に歸るべき反省を促がし給ひし也とせり。總ての人は相聯關せる責任を有す。功利以上の動機に基かざる所業に「不朽」を見出すべからず。僅に風雲に倖倖して大勳位侯爵を誇るども、若ま到處に禽獸の行をなし人格の清淨を穢さば、世界最終の判決の前には浮薄なる俗人の賞讃も夢より果敢なかるべま。我は、正義の念の止むを得ずして希臘獨立軍に投ま筆を劍にかえて中道に歸れしバイロンなく、又博愛の情の抑ゆるに忍びず

して闇黒大陸に入り、黒人に人類の相愛を示したる聖徒なき邦國が、行爲の神聖を傷み、婦女の純潔を犯しながら、恬として國政を調理すと稱え、左手に賄賂を握りながら、右手に聖經をひもとくを少しも怪ざる人々を作り得たるを見、志ある者は一少女の無心の言葉に含み適切な教訓を味ふて可なるを思ふ也。

禍なるかな、富貴權勢に酔へる人々の意の儘なる社會は常に善良を迫害す。彼女は限りなき夜の空に笑ひ、星の靜安を慕ひて遂に逝きぬ。『弱きものよ、汝の名は女也』沙翁をして永くその名をなさせむ。

### 三

徒に悲調を江風に托する勿れ。所謂人心の腐敗は此を吾人の身邊に於てすら見るにあらずや。人を化せむとせば先づ自己を修めよ。他の不潔を矯正するなりと稱えて己れも竊かに不潔に入りて之を偵察するが如きは、机を同くま枕を等くするものに能く忍ぶ所なりや。よしや此の探偵的方法によりて聊か得る所ありとするも其結局の歸趣は單に形式の徳教に終らむのみ。感化力なき制裁は只一時を塗抹するのみ。自ら顧みて思へ、我果して此の崇高なる力あるかと。退て己を研ぐに餘念なかれ。始めは冷やかなる風の野を渡にも似ん、樹を動かし瓦を破る颶風は、されども、此裡に潜む也。高尚なる道義の心より生ぜず只赫々の觀を呈えて蠢たる權力の得取に資せむとするは則人を欺き又己を賣る也。世其人あらん吾人は斷して此に與せじ。若し夫れ自ら此の陋巷に彷徨するものに到ては果てて何の心ぞや。彼等は市井の賈人を捕へて共に談するに足らじとて、幼時共に學びし人を見えず。境遇の高卑はラストの優劣を生して對座する能はずとてながら、獨り蝮蛇に等えき醜骸を美な

かとするか。之に高等の教育を施せば動もすれば直に倨傲輕躁に陥り、之を無賴の路に委せば忽ち  
に於て人の皮を被る獸蟲と化す。女を以て美なりと慕ふなりとするは尙理想に止る。然れども彼を  
此處に止むるものは賤劣なる有髯の男子なり。爾等顧みて我心に聞ふとき、己が精神の陋と慘とに  
煩悶せざることを幾何ぞや。

徒に悲音を傳る勿れといひし我も、亦此の病に陥りたり。談るども盡きじ、日も將に暮れんとす。

我は卿等の爲めに劔を拔て荆軻を舞はむ。我れ敢て彼が行爲を賛するにあらず、只壯士一度去て歸  
らざる其の意氣を愛す。と。

遠き山も近き水も一面の霞に包まれて、闇は次第に天地にひろがれり。一日の暮、一年の暮、一生  
の暮、世紀の暮。暮は物の哀れをどいむる多き。十九世紀の暮に悲劇あり。平等を尊び平和を愛  
せし米國は其天職を棄て、帝權主義の一時の花に眩みたり、椰子樹綠まげきヒリッピンの下に生れ  
る大義の萌芽は虎狼の權力に埋伏しぬ。『上帝の照覽し給ふ眼前に起ちて應戰す』る南阿の義軍もつ  
まりは權勢の謳歌に終らむ。日已に暮れたり、いざ歸らむ、と水棹を取りて彼の面をみだせば雲に  
宿る星影のさめき、仰き見れば星斗欄干として輝くさまの静かなれども如何に不朽の意味を含む  
かな。知り得たり、かの幾萬の星の晃りけ限り人の愛心は長へに消えざるを。成と敗とは未だ宇宙  
の大本を動かすものにあらず。大義大業の成るや必ず聖賢義國の豫め其の犠牲たるものある也。杜  
軍總督たりし故ジョーベル、軍に將となりて出づるとき曰く、勝敗は神意也共和國の存亡は豫り知り  
易からず期する所は只鞠躬死して後ち止まんことを。要は唯我心靈の修練を完うまで天命を盡す



にあり。成敗と權威と生死と遂に何者ぞ、夕をも俟たぬ蜉蝣の身にもましてはかなき煩悶の境を脱  
ぎ、願くはかの安慰の裡にひるざる闇に獨りきらめく星のこゝろを讀め。

## 情

柴山岡城

小犬隔花空吠影、夜深宮禁有誰來、春月朦朧として眠るが如く、夜風徐ろに吹いて花影を揺かすの  
時、一犬遠く吠えて落花數點、佳人と才子とは巧みに自然の情景を弄ぎ、高青邱の詩情は巧みに這  
般の情景を寫し出でて餘蘊なき。天に情なきか、人に涙なきか。請ふ見よ、月は朧ろに情の雲に隠  
れ、花は靜かに情の風に笑ふ。此間熱血熱淚何か爲めに送り何が爲めに潸々。げにや情海の浩波は  
貴賤と上下の柵欄を許さず、王公貴族の樓台より三家村裏の小天池まで、あらゆる人心に往來さつ。  
皎月一輪天に懸る處には槳を横へて雁を泳せし古英雄か、戈とりて月見る度に思ふ哉と嘆せし武士  
の情か、花ならば探りても見む今日の月と泣きし盲者の涙か、而えて又かの白皚々たる庭前の雪に  
は、四十七士の忠情か、櫻田の熱血か、否又吾人はかの浦里と袖袂とを思はざる可からず。

頭を回せば天遠くきて地は廣く、既往茫として夢の如ければ、未來も亦茫ときて夢の如し。此間英  
雄豪傑幾人が立ちて幾人が斃れ、夜半夢未だ暖かならざるに、天旋地轉、轉た多情の詩人をして、  
可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人と嘆せしむ。嗚呼果敢なき生命を哀れの天地に享け、煙の如く消  
え煙の如く去る、其間何物か残り何物か存する、松柏千年終是朽、況んや塚中の枯骨、風雨空しく  
曝して幾百年、終に土となり塵と散すれば、哀れ震天動地の大英雄、渾圓球上又一物の遺跡たる殘